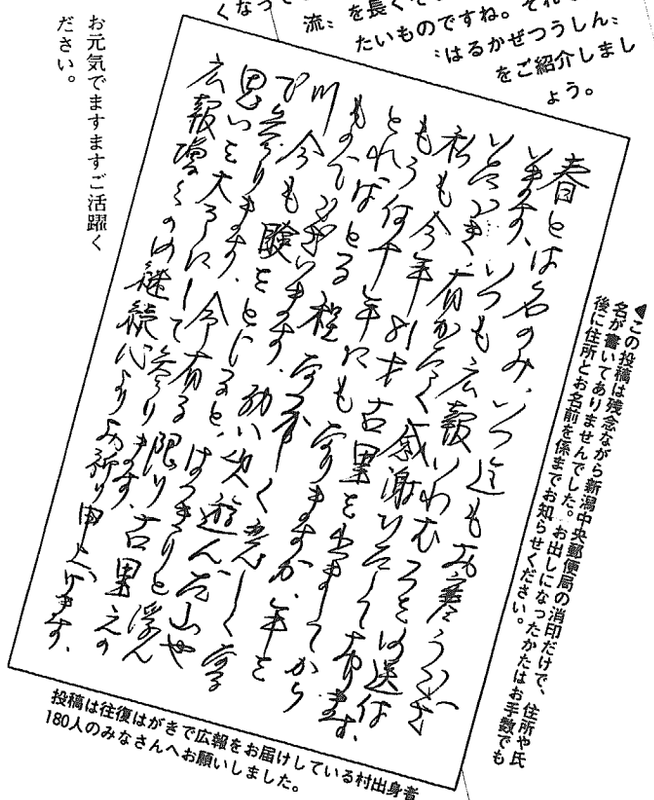
おかげさまで25年—300号

25

昭和37年5月12日 広報いわむろは産声を上げた

はるかぜつうしん

はるかぜとともに全国各地から、なつかしい便りが届きました。広報いわむろ300号記念として募集した「ふるさとへの便り」に寄せられたものです。みなさん〝味〟のあるいい投稿です。村出身のみなさんの心の中には〝どっこいふるさとは生きていた〟——とうれしくなってしまいます。これからも〝心の交流〟を長くそして大切にしていきたいものですね。それでは、〝はるかぜつうしん〟をご紹介しましょう。



◀この投稿は残念ながら新潟中央郵便局の消印だけで、住所や氏名が書いてありませんでした。お出しになったかたはお手数でも後に住所とお名前を係までお知らせください。

投稿は往復はがきで広報をお届けしている村出身者180人のみなさんへお願いしました。

みんなが〝いい村だね〟と言ってくれます

岩井　光男さん（55歳）

住所／神奈川県足柄下郡真鶴町695 ㈱鈴木組内
職業／船員
出身地／間瀬5区

今四月一日号で通巻三百号、誠におめでとうございます。

わたしの働いている真鶴にも「町報まなづる」が発行されていますが、岩室村のように村外で働く出身者のところには送られていないようです。そのため、毎月送られてくる「広報いわむろ」を何よりの楽しみにしています。また、事務所の人や船に乗っている人たちも「いい村だね」と言って感心して見ています。

ところで、表紙の「岩室みてある記」、最高のヒット作ではないでしょうか。「ふだん見落としそうな所をよく見つけ、取材したものだ」と言ってくれた人もありました。村内のいろいろな出来事を知ることができるうえ、今月はどこの写真かな、と月始めが楽しみで、わくわくしながら封を切る次第です。一つの要望として、出来れば村の古い歴史が知りたいのですが、今度企画してはいかがでしょうか。どうぞ皆様もお元気でますますご活躍ください。

わたしの大切なラブレター!?

金川　正子さん（51歳）

住所／東京都江東区東砂4—4—14
職業／主婦
出身地／間瀬4区

間瀬に帰るたびに、広報いわむろをまとめて読むのが、一つの楽しみでした。「おばあちゃん、何月号がないよ」なんて大騒ぎをしながら……。その広報を今では毎月送っていただき本当に喜んでいます。平凡な主婦業に専念しているわたしは、毎月届く広報を首を長くして待っています。懐かしい顔、記事—月始めに郵便受けをのぞくのが楽しみです。少しでも遅れると、〝きょうもラブレター（広報）が来ていない〟と、独り言を言っている自分がおかしくなり、ニヤニヤしているわたしです…。

田舎の友達が集まると、いつも子供のころの間瀬での思い出話に花が咲き、時には涙したり笑ったり、またふるさとの変わり様に驚いたりしています。

わたしも二十六年間過ごした大好きな〝ふるさと〟での楽しかった思い出を大切に、これからも暇を見つけて時々帰りたい、と思っています。

ふるさとの想い出が対話の原点

柏木フヂエさん（55歳）

住所／神奈川県横須賀市上町3—32
職業／主婦
出身地／間瀬2区

毎月の広報を懐かしく拝見しています。村の皆様のご活躍とご苦労が紙面を通じて伝わってきます。

わたしたち夫婦はともに間瀬の出身で、ふるさとの想い出が対話の原点になっています。そんななかで広報を通じ「ふるさとが書ける」——なんとすばらしい事でしょう。誰もが持ち続ける想い出の小箱。わたしの小箱を繙いてみますと、荒れ狂う鉛色の冬の海。空と海が溶け合う、うららかな春の海。また強烈な太陽の下で、暗くなるまで泳いだ夏の海。そして、白岩を茜色に染めて浮き出しながら水平線の彼方に沈む夕日のすばらしさ、さざめく星などなど…。それらは、わたしの胸の奥深く焼き付いて離れません。

過疎だった当時の村も、今では都会の波に洗われて発展する喜びの反面、一抹の不安も感じさせます。しかし、時代が流れても、わたしがふるさとを語るとき、人情に厚い村の人たち、そして喜怒哀楽を表現する日本海——それがわたしの間瀬村なのです。最後に「広報いわむろ」のご発展と村民の皆様のご健康を心からお祈り申し上げます。

日本最北端の地からメッセージ

柏木　健聡さん（72歳）

住所／北海道稚内市港5丁目6—48
職業／会社役員
出身地／間瀬2区

毎月「広報いわむろ」をお送りいただきありがとうございます。主人はただいま病気療養中ですので、旅行することもかないませんので、広報で懐かしい故郷を思い出し、楽しく拝見しております。早く治って、風光明媚な間瀬に帰り、両親のお墓参りをしたい、といつも申しております。

日本の最北端の地、北海道稚内から岩室村のますますのご発展をお祈りいたしております。

（柏木　幸）

〝越後でるときゃ涙も出たが…〟

本田　四郎さん（73歳）

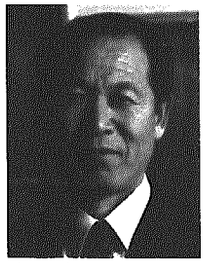
住所／東京都北区志茂2—44—1
職業／みやこ産業㈱代表取締役
出身地／和納6区

「越後出る時は涙も出たが、今じゃ越後の風もよう」と、昭和三年に上京したころ、先輩によく言われたことを覚えています。当時は不景気だったので、他国へ働きに出ても永く辛抱するようにとの意味の言葉だったと思います。それまでは、修学旅行でも県外には出たことがなかった時代でしたから、列車の窓から弥彦山が見えなくなった時には涙が出たことを覚えています。

わたしは最近、実家の法要で年に二、三回帰郷しますが、新幹線から弥彦線に乗ると、あちこちから新潟弁が聞こえてくると、〝ふるさとへ来たんだなあ〟と思え、また車窓から弥彦山が見えると懐かしく感じます。しかし、和納駅が岩室駅に変わったことは、なんとなく淋しく感じています。この五月、北区赤羽地区の五社の神社総代で弥彦神社参拝の懇親旅行（バス）が計画されており、わたしも参加の予定です。ふるさとが近くなったのには今更ながらに驚いています。広報いわむろの「おくやみ」の欄で同級生や友人の他界されるのを見るたび、実に残念に思います。わたしも健康管理には十分気をつけています。おかげさまで業界の相談役や町内会、神社総代などの役職のほか、趣味で菊作りもして忙しい毎日を過ごしています。

〝あれっ！登校しても生徒がいないぞ〟

坂井　弘さん（57歳）



住所／巻町堀山団地
職業／教師
出身地／間瀬2区

昭和二十九年四月、砂利道の峠道、トンネルをくぐると青い海が見えた。そして、急な坂道を登って間瀬中学校へ。平屋の校舎、裏の松林越えに眺める真っ赤な大きな夕陽——。

六月のムンムンとする朝まだき（早朝）、いわし舟が帰って来る。浜は大漁でにぎわい……朝、登校しても生徒がいない。「浜の手伝いが忙しくて登校出来ないのだ」という電話。その一方、運動会ともなれば、村中の老若男女が集まる、「ホラ、ガンバレー」と。文化祭には、いわし、さばの缶詰を作って卸売りが行われた。懐しい思い出。